

特別支援だより♪

2020. 5月 No.1

さて、みなさん！いよいよ学校が再開されますね。急なことで私たち、保護者、何より子どもたちは少し動揺を抱えた状態でのスタートになるかと思います。では、再開された時にどんな状況が生まれることが予想され、どんな視点や対応が私たちに求められるのでしょうか。

「病弱教育」のプロフェッショナルである副島賢和（そえじま まさかず）さん（昭和大学大学院保健医療学研究科准教授ですが、20年間の教員経験もある方です）の考え方をもとに考えてみます。

副島さんは、「病弱教育」を受ける子どもたちが受ける影響と休校による子どもたちへのネガティブな影響は似たところがあると言います。それは、「**学習の空白、運動や遊びの制限、集団活動の不足、人とのかかわり合いの制限**」などです。病弱教育に携わる教員はこの課題について考え、子どもたちに「力をつけて」元の学級に戻すことを行っているそうです。

この「力をつける」とは、子どもたち自身が安全と安心を感じながら、悲しみや不安、苛立ちなどに向き合う力のことだそうです。自分は自分のままでいい、生まれてきてよかった、そう思うことができたら困難に向き合う力になります。病気になった自分、病気の再発、周りからの視線や態度などへの不安や悲しみ、苛立ちと向き合い、それでも私は私でいいんだと思えることだと私は解釈しています。

現在も新型コロナウイルス感染症に関しての人権侵害が問題になっています。この現象も俯瞰的に分析すれば、一人一人が現状を受け止めることができず、「疑心暗鬼・被害者意識・苛立ち・恐怖感」を抱き、自分とは違う異質なもの（感染者、濃厚接触者など）や目に見えないウイルス、を排除したいという態度が現れたものと捉えることができます。それは、自分では受け止められなかった不安を取り去るために相手を傷つける言動として立ち現れた一種の防衛反応とも言えるかもしれません。

この状況は、子どもたちにも同じことが言えます。東日本大震災が起こった時に『津波ごっこ』をする子どもたちがいたそうです。だとすると、『**コロナごっこ**』をする子どもたちが出てくるかもしれないと副島さんは言います。その背景が「不安感」「苛立ち」「恐怖感」「孤独感（家でずっと一人であった子）」からきているものだとすれば、それを受け止めずに注意や叱ることをしても意味はありません。

大切なことは、「見えないものってこわいよね」「自分がなったら嫌だよね」としっかり子どもたちの気持ちを受け止め、そして「その願いを相手に、傷つける方法で表現すること、は違うよね」と丁寧に正しい知識を伝えることです。

『**受容はするけれども、許容はしない**』この姿勢を貫くこと、ネガティブな感情を持つ自分はダメではなく、そのような感情が生まれたときにどう向き合っていくのかを大人が伝えていくこと、それが大切なのだと思います。（ネガティブな感情は大人でも持つものだよと教えてあげると安心します）

私たち大人がモデルとなって感情のつきあい方を示しながら、子どもたちを大きく受け止め、安全で安心だと思える空間を作っていきましょう～♪

チーム河原田で子どもたちを
支えましょう～♪
We can do it! By 平居語録



(文責：樋口)